

# 茨城大学学報

第320号

平成27年4月～平成27年5月



ラムサール条約への登録が決まった涸沼

## INDEX

- ◆ 平成27年度入学式・学校式辞
- ◆ 「茨城学」学部1年次の必修科目として開講
- ◆ 茨城大学COC事業 地元企業との「交流会」開催
- ◆ 茨城大学名誉教授称号授与式・懇談会を開催
- ◆ 模擬裁判を導入した参加型授業を水戸地裁との連携で実施
- ◆ ペンシルバニア州立大学の学生・教員が来校 本学学生と交流
- ◆ ドイツの原発倫理委員を務めたシュラーズ氏ら招きシンポジウム
- ◆ 涸沼のラムサール条約登録に寄せて三村学長が声明
- ◆ 「サイエンステクノロジーフェスタ2015」開催

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

## ◆ 平成 27 年度入学式

平成 27 年度茨城大学入学式が 4 月 7 日（火）、茨城県武道館（学部・専攻科）および茨城大学講堂（大学院）において、大勢の保護者および学内関係者らの参列の中、挙行されました。

式は、国歌吹奏、各学部等総代の誓書提出にはじまり、学長式辞、来賓祝辞、役員・学部長等の紹介と続き、入学生代表宣誓（人文学部・小杉山伸之さん、人文科学研究科・萩谷智恵さん）より宣誓がありました。最後に参列者全員による校歌斉唱で閉式となりました。学部・大学院・専攻科を併せて 2,255 人の新入生が、それぞれの夢や目標に向かって新たな一歩を踏み出しました。



## ◆ 平成 27 年度入学式（学部・専攻科）学長式辞

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

茨城大学を代表して、皆さんを心から歓迎します。また、ご家族、関係者の皆様にも、お祝いを申し上げます。春の美しい季節に、1,747 名もの新入生を迎え入れることができ、私達は大変うれしく思っています。

さて、新入生の皆さんは、茨城大学での学生生活に対して、様々な期待と一抹の不安を持っているのではないのでしょうか。そこで、大学とはどういうところか、また、本学ではどのような教育を目指しているのかについてお話ししたいと思います。

大学あるいは大学院を卒業すると、皆さんは社会に飛び立ちます。つまり、大学は、教育プロセスの最後の段階であり、社会に飛び立つ準備をすところすです。そのため、大学では人類が積み重ねてきた学問の成果を皆さんに伝えると同時に、社会の変化に合



わせた教育が必要だと考えています。

私達が生きている 21 世紀は、かつてない変化の激しい時代です。現代は時代の転換期にあると言っていいでしょう。グローバル化によって世界が一つの経済圏になり、国境を越えた経済活動や競争が当たり前になっています。その一方で、地球温暖化や水問題など地球規模の環境問題も生じています。また、情報技術の発達によって約 20 年後には 65% の人が今はまだ現れていない仕事をしているだろうという予想さえあります。日々の変化は余り感じなくても、5 年 10 年のスパンで見ると、社会は大きく変化

しています。皆さんには、本学での 4 年間で、こうした 21 世紀の社会を切り拓いていくリーダーに成長して欲しいと期待しています。

そうした時代の転換期に必要な能力はどういうものでしょうか。単に知識を沢山持っているのでは十分ではないことは明らかです。私は、以下のような力が必要だと考えています。

第一は、世界を見る広い視野、つまり、物事の大局を把握する俯瞰力です。これによって、世界の動きの中で自分はどこにいるのかという自分なりの地図を持つことができます。

第二は、深い専門性です。社会で仕事をするということは、専門家として課題を解決していくことを意味します。そのためには、それぞれの分野の専門的学力やスキルが必要です。先端産業の技術者であれ、地域の社会問題の解決を担う公務員や次世代の子供を育てる教員であれ、仕事は違ってもそれぞれ課題があり、その解決には専門的な力が不可欠です。

第三は、他の人と力を合わせる実践力です。これは、他の人と一緒に課題解決を図る力です。これからは外国人と一緒に議論し、協力する機会が一層増えるでしょう。そのために、英語によるコミュニケーション力も必要になります。

このように考えて、本学の教育では、「21 世紀において社会の変化に主体的に対応し、自らの将来を切り拓くことができる総合的人間力を育成すること」を目標にしています。私達は、皆さん誰もが、自分の将来の目標を見だし、そのために必要な能力を身につけられるような教育を行いたいと考えています。

具体的な教育の内容を、少し紹介しましょう。例えば、グローバルな活躍を目指す人には、実践英語教育や海外留学につながる教育プログラムがあります。1 年生には全員、TOEIC という共通の英語検定試験を受けてもらい、自分の力を測ってもらいます。また、新入生に必修の「茨城学」という講義を始めます。この講義では、茨城大学の教員と地元の自治体や企業で活躍する講師が、私達を取り巻く地域社会の生きた課題を紹介し、皆さんと議論することが計画されています。また、今年から、多くの講義を学生の参加

型に転換していきます。アクティブラーニングと言いますが、事前にテーマを調べてきたり、教室で学生同士が議論したりする機会が格段に増えるはずです。

次に、皆さんにどのように大学生活を過ごして欲しいかについてお話します。大学が高校までと一番違うのは主体性の重視です。例えば、授業には選択科目が沢山あり、カリキュラムは自分で組み立てなければなりません。ですから、自らの志望を考え、どの科目を履修するのかを自分で決めます。また、時間割には講義のない時間帯が生まれます。その時には、図書館のラーニング・コモンズなど自由に使えるスペースで、自分の勉強をして欲しいと思います。つまり、名実共に、大学生活の主人公は皆さん一人一人であり、生活時間の全てを自分で管理することになります。もちろん、履修科目や学修、生活の相談のためにクラス担任がおり、相談窓口があるので、遠慮無く相談して下さい。大人になるとは主体的な人間になるということであり、本学でその第一歩を踏み出して欲しいと思います。

第二は、友人を沢山作って欲しいということです。大学の友人は、とてもいいものです。生涯の友になる大切な友人も出てくるでしょう。大学は正規のカリキュラムに従って教育をするところですが、「隠れたカリキュラム」と呼ばれるものもあります。それは、サークルやボランティア活動、あるいは、先生や友人との語らい、読書、新聞等ですが、こうした大学生活の全てが、自立した人間へと成長する機会になります。そして、これらを通して先に述べた総合的人間力が養われるものと考えています。私は、皆さんが、正規のカリキュラムと隠れたカリキュラムの両方、つまり、茨城大学での全ての勉強と生活を通して、変化する21世紀を生き抜ける人間、さらに、よりよい社会を作るリーダーに成長することを心から期待しています。

今年は、25名の外国人留学生が入学しました。中には、まだ英語の方が分かり易いという人もいるかも知れないので、簡単に英語で歓迎の言葉を述べたいと思います。

There are 25 foreign students attending this ceremony. Therefore, I would like to offer congratulations to you in English. On behalf of Ibaraki University, I am extending my sincere welcome to you all. We are very much pleased to have foreign students as new members of our university in this beautiful season, April. We have prepared many courses which you can find suitable for your study. I hope you can achieve the goals of your study and enjoy the campus life at Ibaraki University.

以上をもって入学式における式辞と致します。

2015年4月7日 茨城大学長三村信男

## ◆ 「茨城学」学部1年次の必修科目として開講

茨城大学では、平成26年度「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）の採択を受けた「地域志向教育」の一環として、全学部1年次（約1,700名）を対象とした必修科目「茨城学」を開講しました。

「茨城学」は、茨城の自然・地理・歴史・文化・産業などの学習を通じて多角的な理解を深めるとともに、地域が抱える課題や未来について教員や他の学生、地域の人々と一緒に考える授業です。全15回の講義のうち、前半は本学の人文・教育・理・工・農の各学部や茨城大学五浦美術文化研究所の教員が、それぞれの切り口から茨城の各地域の課題や取り組みについて講義をし、後半は茨城県や本学キャンパスを有する水戸市、日立市、阿見町のほか、常陸太田市、茨城町、大洗町の自治体担当者が講師を務めます。また、各回の講師による講義の後にはグループディスカッションの時間が設けられるなど、学生たちが主体的に学習に関わるアクティブラーニングを採り入れています。

4月14日（火）に行われた初回講義では、三村信男学長が登壇し、「茨城学」の授業を通して地域の具体的な課題を学ぶことの意義について説明。また、学生たちはそれぞれの茨城に対するイメージなどを話し合いました。

担当教員の社会連携センター 清水恵美子准教授は、「茨城を学ぶことは地域の課題を知ることになり、さらにそれが世界の課題にも連動していく。県外出身の学生も含め、『茨城』という切り口から積極的に学び、地域を先導できる人材に育ててほしい」と話しています。



初回は三村学長も登壇



教員、スタッフも交えたグループディスカッションも特徴

## ◆ 茨城大学 COC 事業 地元企業との「交流会」開催

4月23日（木）、文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」の一環として、地域に根ざしながら、世界を視野にビジネスを展開する気鋭の企業を招き、交流会を開催しました（18企業26名の参加）。

茨城大学 COC 事業では、昨年度、ともに人材を育成するパートナーとして、大学幹部が地元の24企業を訪問し、ビジネスモデルや技術のみならず経営理念、経営方針、将来構想、また、そこで働く従業員の様子、地域社会との関わりなど、様々な面から経営者と意見を交わすとともに、茨城大学 COC 事業の説明を通じ、同事業への理解を求めました。

意見交換会では、企業経営者と学長、大学幹部との直接の意見交換が行われ、各企業の経営者からは、大学に対する期待や要望、企業が求める人材の資質、能力等について意見が出されました。大学での教育が企業の現場でどのように活かされるか等について活発な議論が交わされ、地域社会の大学への期待度が大きいことがうかがえました。

茨城大学 COC 事業では、今後も地域の企業とのつながりを深め、地域 PBL、また「茨城学」等をはじめとする地域を志向する科目への登壇などを通じて、一層の連携を図っていきます。



意見交換会



懇親会

### ◆ 茨城大学名誉教授称号授与式・懇談会を開催

茨城大学名誉教授称号授与式が4月24日（金）に事務局第2会議室で行われ、各理事、各学部長が出席のもと、三村信男学長から新たに名誉教授となられた方々に称号記が手渡されました。

引き続き懇談会が行われ、近況報告を交えながら終始和やかな雰囲気の中で歓談が行われました。

平成27年4月1日付けで茨城大学名誉教授となられた方は、次のとおりです。

（元 人文学部）鄭 基成、深澤 安博、守屋 唱進

（元 教育学部）小野 義隆、佐藤 篤、寺本 輝正、竝木 崇康、橋浦 洋志

（元 理学部）天野 一男、五十嵐 潤一

（元 工学部）前川 克廣

（元 農学部）高原 英成

（元 保健管理センター）宮川 八平

以上 13名（敬称略、元所属別・50音順）



称号授与式後の記念写真

## ◆ 模擬裁判を導入した参加型授業を水戸地裁との連携で実施

5月13日（水）、水戸地方裁判所との連携により、模擬裁判を通して裁判員裁判について学ぶ授業を実施しました。

この授業は、水戸地方裁判所による裁判員制度の教育・普及活動として実現したもので、人文学部の学生約200名が受講。アクティブラーニングを採り入れた、本学の地域連携の取り組みの一環でもあります。

今回は、アルバイト先で紙幣をカラーコピーした男性が通貨偽造の罪に問われる、という身近な設定で、学生と水戸地方裁判所の裁判官などが、裁判官、裁判員、弁護士、検察官などの役を務める形で模擬裁判をおこないました。その後、グループに分かれて評議をした上で、各グループがそれぞれの判決を言い渡しました。

授業を担当した水戸地裁の裁判官は、「今回のケースでは有罪という判決がもっと出ると予想していたが、無罪と判決したグループも結構あり、判決理由にも説得力があった。短い評議時間と限られた情報にもかかわらず、深い議論ができた」と講評。その後の質疑応答では、「同情したくなるような犯行動機の場合、量刑に影響するのか」「執行猶予になるのはどういうときか」といった質問が出されました。

授業を統括する荒木雅也 人文学部准教授は、今回の取り組みについて、「社会のグローバル化が進む中、これまで以上に求められるであろうディベートの力を、模擬裁判や法律学を通して本格的に身につけてほしい」と話しています。



学生たちも裁判官などの役割を務め、模擬裁判を実施

## ◆ ペンシルバニア州立大学の学生・教員が来校 本学学生と交流

茨城大学と大学間交流協定を結んでいる米国・ペンシルバニア州立大学 (PSU) から、学生ら 11 名が来校し、5 月 14 日 (木)、本学の学生や教員との顔合わせを兼ねた昼食会を行いました。

昼食会にて三村信男学長は、「キャンパスの周りでは自然や田園の風景も見られる。水を張った田んぼが広がる今は、一番良い季節。滞在を楽しんでほしい」と英語で歓迎の挨拶を述べました。また、本プログラムで日本側のリーダーを務めている学生が、「秋には私たちが PSU を訪問するので、この機会にしっかり友好を深められれば。困ったことやわからないことがあったら気軽に聞いてほしい。私たちの英語をヒアリングするのはちょっと疲れるかも知れないけど」とスピーチし、場を和ませました。

PSU で日本語と地域研究を専攻しているというザッカリー・ヴィダルさんは、「家族が海軍に所属しており、子どもの頃、祖父から沖縄での戦争の話なども聞いていて日本に興味をもつようになった。将来は翻訳家になりたい」と話し、今回の滞在に期待を寄せました。

PSU の学生らは、その後日本に約 10 日間滞在し、講義や体験を通して日本の事情などについて学習。また、9 月には本学の学生たちが PSU を訪問する予定です。



引率したグレゴリー・スミッツ先生は日本語でスピーチ

## ◆ ドイツの原発倫理委員を務めたシュラーズ氏ら招きシンポジウム

5月23日（土）、ベルリン自由大学（ドイツ）教授のミランダ・シュラーズ氏、東京大学名誉教授の山脇直司氏らを招き、「エネルギーから考えるポスト震災社会とサステナビリティ学」と題したシンポジウムが開催されました。これは、気候変動や自然災害への適応策の検討や持続可能性に関する研究・教育を行っている茨城大学地球変動適応科学機関（ICAS）のほか、一般社団法人サステナビリティ・サイエンス・コンソーシアム（SSC）、国立研究開発法人国立環境研究所などが主催したものです。

環境政策の専門家であるミランダ・シュラーズ氏は、2011年3月からドイツ政府の原発問題倫理委員会の委員を務めました。日本の高校や大学で学んだ経験もあります。冒頭の基調講演では、現在のドイツのエネルギー転換政策に至る歴史や倫理委員会の報告の内容、その後の具体的な取り組みや課題などについて話をしました。

その後は、学生、教員、一般市民ら約150名の来場者がグループに分かれ、ワールドカフェ形式で意見を交わし、日本のエネルギー政策について議論を深めました。

議論を終えて、シュラーズ氏は「ドイツのエネルギー転換を方向づけているのはピープル・パワー。温暖化も原発も、地球の持続という点で深刻な問題。今日のような議論を続けていくことが大事」と語りかけました。



学生や参加者らと意見を交わすシュラーズ氏

### ◆ 涸沼のラムサール条約登録に寄せて三村学長が声明

茨城県の茨城町、大洗町、鉾田市の3市町にまたがる涸沼（ひぬま）が、湿地の保全とワイズ・ユース（賢明な利用）を目的とする「ラムサール条約」に登録されたことに伴い、三村信男 茨城大学長が声明を発表しました。

茨城大学は、前身の旧制水戸高校における研究を受け継ぐ形で、創立当初から涸沼の多面的な研究を進め、1956（昭和31）年には涸沼湖畔に「涸沼臨湖実験所」を設置し、動物、植物、地質、水質などの調査研究を行ってきました。その後、臨湖実験所を潮来市の北浦湖畔に移動してからも、生態や地質の調査、地質行政や地域市民との協働による研究・教育活動を行っています。

こうした経緯を踏まえ、三村学長は「貴重な汽水湖である涸沼を教育・研究のフィールドとすることは、周辺地域にとってはもちろん、世界中の豊かな環境資源や生物多様性を守るための知見をもたらしてくれる」とコメント。また、10年後の条約登録更新を見据えて、「これまで積み重ねてきた知見を涸沼の保全・資源利用に活かしていくとともに、これからも環境・生態保護につながる調査・研究、子どもたちへの教育などの取り組みを推進し、次の10年に向けて、地域の皆様と一緒に『世界の涸沼』を育てまいます」と述べています。

今回の条約登録を受けて、茨城大学では、涸沼の地質や生物、環境などを学べる図書館「土曜アカデミー」の連続講座などを、地域の方々を対象に今年10月より実施する予定です



ラムサール条約への登録が決まった涸沼

### ◆ 涸沼のラムサール条約登録に寄せて（学長声明）

このたび涸沼がラムサール条約に登録されましたことは、今まで涸沼を地域の貴重な環境として保全に努めてこられた地域の皆様のご尽力と、茨城県や周辺町村の方々による登録推進活動の賜物であり、心よりお祝い申し上げます。また、大学創設以来、研究

や教育を通して涸沼に関わってきた本学としても、大変喜ばしく思います。

茨城大学は、前身の旧制水戸高校における研究を受け継ぐ形で、涸沼の多面的な研究を進めてまいりました。1956（昭和 31）年には涸沼湖畔に「涸沼臨湖実験所」を設置し、動物、植物、地質、水質などの調査研究を行ってきました。その後、臨湖実験所は潮来市の北浦湖畔に移動し、現在は「広域水圏環境科学教育研究センター」となっているものの、その後も生態や地質の調査、行政や地域の方々との協働による研究・教育活動を続けております。

たとえば、海岸工学のアプローチから水質を調査するプロジェクトでは、固有の生物群を有する涸沼の塩分濃度が、那珂川から湖内に至る水底の特徴的な地形と潮汐の作用によって絶妙に保たれているという事実が明らかになりました。それによって、川と海の両方の魚やシジミが育まれ、それを求めて多くの野鳥が集まり、さらに釣り人やバードウォッチングの人たちが集うという、人と自然が共生した環境が保たれてきたのです。このような貴重な汽水湖である涸沼を教育・研究のフィールドとすることは、周辺地域にとってはもちろん、世界中の豊かな環境資源や生物多様性を守るための知見をもたらしてくれるといえます。

今回の条約登録は喜ばしいことですが、これはゴールではなく、新しいスタートだと考えます。10 年後には登録更新のための審査が行われることになり、ラムサール条約が求める「ワイズ・ユース（賢明な利用）」の進展が問われることになるでしょう。茨城大学は、これまで積み重ねてきた知見を涸沼の保全・資源利用に活かしていくとともに、これからも環境・生態保護につながる調査・研究、子どもたちへの教育などの取り組みを推進し、次の 10 年に向けて、地域の皆様と一緒に『世界の涸沼』を育ててまいります。

## ◆ 「サイエンステクノロジーフェスタ 2015」開催

5月30日（土）、さまざまな実験・体験プログラムや講演を通して科学技術を学ぶことができる一般向けのイベント「茨城大学サイエンステクノロジーフェスタ 2015」を開催しました。

「茨城大学サイエンステクノロジーフェスタ」は、地域の方に科学技術への親しみをもってもらうことを目的に毎年実施。理学部に所属する物理、化学、生物学、宇宙工学や地学といった各分野の教員による講演や実験・体験の講座を行っています。

今回、前半の「身近にサイエンス！講演」では、数学・情報数理領域の長谷川 雄央 准教授が、「『つながり』の数理」と題し、友人関係からサイバー上のネットワークといった人と人のつながりに数学的な視点から迫る内容の講演を行いました。身近な世界の意外な法則性を知った参加者たちは、時折驚きの声をあげながら興味深く聴講していました。

後半は、理学部内の各実験室に分かれて、各分野の教員が講師を務める6つの実験・体験プログラムを展開。来場者は、身近な道具や材料を使った実験や、専門の器具を用いた研究体験を通して、さまざまな現象の仕組みや科学の不思議に触れ、楽しみました。



炭酸飲料を用いて「噴火」を再現



教員の手ほどきを受けながらハチに餌やり